

第34回 日本看護歴史学会学術集会

— 歴史から学ぶこれからの看護 —
生誕200年記念『ナイチンゲール展開催』

講演集

会期

2020年9月4日^金・5日^土

会場

徳島文理大学保健福祉学部看護学科・
地域連携センター

日本看護歴史学会

JAPAN SOCIETY OF NURSING HISTORY

第34回 日本看護歴史学会学術集会

— 歴史から学ぶこれからの看護 —
生誕200年記念『ナイチンゲール展開催』

講演集

会期

2020年9月4日金・5日土

会場

徳島文理大学保健福祉学部看護学科・
地域連携センター

日本看護歴史学会

JAPAN SOCIETY OF NURSING HISTORY

ご 挨拶

第34回日本看護歴史学会学術集会

会長 金井 一薫

徳島文理大学大学院看護学研究科



第34回学術集会を開催するにあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

第34回学術集会は、四国・徳島の地で行われる初めての会となるはずでしたが、新型コロナウイルス感染症の全国的な拡大が勢いを増している状況下では、実施はきわめて困難との判断のもと、「誌上開催」という形をとることになりました。

多くの方が期待を寄せてくださっていましたのに、とても残念ですが、これも歴史の1ページを刻む貴重な出来事と考え、新たな学術集会の形態を探るきっかけにしたいと思います。年月を経れば、この経験の意味と実態が見えてくるのではないのでしょうか。

さて、本年のテーマは「歴史から学ぶこれからの看護」です。

これまでの33回にわたる歴史学会の内容と、本学会が大事にしてきた視点を継承し、歴史から深く学び、それを近未来の看護のあり方やかたちとして、いかに活かすかという視点をもって臨みたいと思います。演者の方々はその点を踏まえて、近未来の看護界に大きなインパクトを与えてくださるでしょう。他の学会では耳にすることができない斬新な講演内容をご堪能ください。

今年はナイチンゲール生誕200年という記念すべき年にあたります。クリミア戦争において感染症が爆発する現地に赴き、政府の衛生委員会のメンバーと共に、劣悪な衛生環境を改善し、そこに見事な看護を展開することで、更なる感染の防止に努めたナイチンゲールの働きは、165年を経て起こった新型コロナウイルス感染症との闘いに直面したわが国において、その業績が新たに掘り起こされています。“感染症とナイチンゲール”。これは本学会が重視する新鮮なテーマのひとつとなりました。

また、徳島といえば「阿波踊り」、そして文人「モラエス」が生きた地です。ヴェンセラウ・デ・モラエスはポルトガル人ですが、徳島の女性と結婚し、生涯徳島を愛し、多くの文章を書き残しています。新田次郎氏とそのご子息の藤原正彦氏の共著『孤愁』で有名になりました。本学会では、モラエスの研究者・石川榮作先生によって、モラエスの生涯が詳細に語られています。モラエスを通して、私たちは日本の良さに気づかされるはずです。

さらに今回は、3号館3階において「ナイチンゲール展」を開催すべく準備をしておりました。当日はナイチンゲール看護研究所の協力によって貴重なナイチンゲール文献や関連グッズをご披露する予定でしたが、これはいずれまたどこかで機会を作ってご披露したいと思います。

本講演集は、皆さまにとって貴重な蔵書の1冊となることと信じます。どうぞ末永くお手元においてご活用いただければ幸いです。

目 次

参加者の皆様へ	6
演者(特別講演・教育講演・特別企画)の方へのお知らせ	7
発表者へのお知らせ	7
交通アクセス	9
会場案内図	10
学術集会プログラム	12

◆会長講演 (1日目 10:00～11:00 アカンス・ホール)	17
--	----

座長：渡部 尚子(聖路加国際大学)

ナイチンゲール思想をどう継承するか
—『看護覚え書』と『産院覚え書・序説』を通してみえる近未来の課題—

金井 一薫(徳島文理大学大学院看護学研究科 教授)

◆特別講演 (1日目 13:10～14:10 アカンス・ホール)	29
--	----

座長：石川 恵子(前阪南中央病院)

ポルトガルの文人モラエスと徳島

石川 榮作(放送大学徳島学習センター 所長)

◆教育講演

◇教育講演Ⅰ (1日目 11:10～12:10 アカンス・ホール)	47
---	----

座長：魚崎 須美(神戸常盤大学)

ナイチンゲールが描いた21世紀の在宅看護

小川 典子(順天堂大学 保健看護学部 教授)

◇教育講演Ⅱ (2日目 9:30～10:30 アカンス・ホール)	60
--	----

座長：丸山 マサ美(九州大学大学院)

看護の危機と未来

川嶋 みどり(日本赤十字看護大学・名誉教授)

◆理事会セッション

◇理事会セッションⅠ（1日目 14:20～15:20 アカンス・ホール）…………… 71

戦争と感染症 ―そのとき看護師は
―歴史に学ぶ感染症と看護―

基調講演 ス페인・インフルエンザを中心に

講 師：川原 由佳里（日本赤十字看護大学 教授）

司 会：川嶋 みどり（日本赤十字看護大学）

屋宜 譜美子（湘南鎌倉医療大学）

◇理事会セッションⅡ（1日目 15:30～16:30 アカンス・ホール）…………… 74

新型コロナウイルス感染症対策における看護の力
―徳島県の看護活動と今後に向けて―

講 師：稲井 芳枝（公益社団法人徳島県看護協会 会長）

司 会：山崎 公美子（日本医療大学）

◇理事会セッションⅢ（1日目 15:30～16:30 アカンス・スタジオ）…………… 76

歴史研究で心掛けていること
―論文投稿の経験、資料の集め方を中心に―

講演 看護歴史はジグソーパズル

講 師：滝内 隆子（金沢医科大学看護学部長）

司 会：丸山 マサ美（九州大学大学院）

屋宜 譜美子（湘南鎌倉医療大学）

◆特別企画（2日目 10:40～12:00 アカンス・ホール）…………… 81

座長：金井 一薫（徳島文理大学大学院看護学研究科）

歴史から学ぶ学問としての看護に必要なもの
―看護教育の黎明期を知る31人の識者からの意見をもとに―

北島 泰子（東京有明医療大学・准教授）

前田 樹海（東京有明医療大学・教授）

◆一般演題(口演)

◇口演Ⅰ群 (1日目 11:10～12:10 アカンサス・スタジオ)

座長: 高橋 順子(四国大学)

- 口演1 著書『看護と教育の探究』と岡本陽子の生涯 92
○丸山 マサ美
九州大学大学院医学研究院
- 口演2 わが国の近代化が看護教育に与えた影響 94
～幕末からの西洋文化の流れを中心に～
○村田 奈津江
大阪青山大学 健康科学部 看護学科
- 口演3 派出看護婦会における看護婦養成の歴史的な位置づけの再考 96
○春日 広美
東京医科大学 医学部 看護学科

◇口演Ⅱ群 (1日目 14:20～15:20 アカンサス・スタジオ)

座長: 黒田 裕子(園田学園女子大学)

- 口演4 クリミアのミス・ナイチンゲール 98
ーナースたちの記録を中心にー
○山崎 麻由美
神戸常盤大学 保健科学部 診療放射線学科
- 口演5 看護のはじめてと出会う“ナイチンゲール” 100
ー看護のコアを教える「看護学概論」の授業展開ー
○泉澤 真紀
旭川大学 保健福祉学部 保健看護学科
- 口演6 ドイツ看護師協会(DBfK e.V.)の創立者そしてドイツ看護の改革者 102
ーアグネス・カールの生涯と活動ー
○倉鋪 桂子
島根県立大学 大学院 看護学研究科

◆一般演題(示説)

◇示説Ⅰ群 (1日目 13:10～14:10 ホワイエ)

座長: 森下 利子(徳島文理大学)

- 示説1** わが国における看護教員の資質・力量に関する文献調査と今後の課題 106
○田中 千尋
立命館大学大学院
- 示説2** ディアコニッセ養成における看護の精神性(Spirituality)の探求 108
○岡田 京子、佐々木 秀美、加藤 重子
広島文化学園大学 看護学部
- 示説3** わが国におけるもう一つのディアコニッセによる福祉活動 110
一かいた婦人の村における女性保護の為の活動一
○棚田 芳彦¹⁾、佐々木 秀美¹⁾、加藤 重子¹⁾、岡田 京子¹⁾、進藤 美樹¹⁾、林 君江¹⁾、
中井 美美子²⁾
1) 広島文化学園大学 看護学部 看護学科、2) 広島都市学園大学 健康科学部 看護学科

◇示説Ⅱ群 (2日目 9:30～10:30 ホワイエ)

座長: 森下 利子(徳島文理大学)

- 示説4** ナイチンゲール精神に則した青森県立青森高等看護学院の創成期の教育 112
○山本 春江¹⁾、一戸 とも子²⁾、菊池 美智子²⁾、太田 尚子²⁾
1) 元青森中央学院大学 看護学部、2) 青森中央学院大学 看護学部
- 示説5** 看護婦教育を目的とした結核看護の書籍に関する研究 114
○塩見 和子
新見公立大学 健康科学部 看護学科
- 示説6** 文献からみた移動・移乗介助の変遷と課題 116
○堀 文子¹⁾、三上 れつ²⁾
1) 中部大学、2) 元中部大学
- 示説7** 『明治初年醫史料』『慶應四龍閏四月 日記 修文館出張 御使番』にみる 118
入退院患者と医療体制
○加治 美幸
杏林大学 保健学部 看護学科

参加者の皆様へ

受 付

- 1) 参加受付は、初日9月4日(金)二日目9月5日(土)共に、9:00より地域連携センター(2号館)玄関受付で行います。
- 2) コロナ感染対策のため、検温、手指の消毒、マスクの着用、シート類の消毒などにご協力ください。
- 3) 事前に申し込みされている方は、「事前受付」にお越しください。
- 4) 当日に参加申し込みをされる方は、「当日受付」において参加費(会員8,000円、非会員9,000円、大学院生を除く学生2,000円)をお支払いの上、申し込みをしてください。学生の方は学生証の提示をお願いいたします。
- 5) 講演集の購入をご希望される方は、1冊1,000円で販売いたします。
- 6) 受付付近のテーブルに、紐付きネームプレートを用意いたしますので、ネームカードに氏名・所属をご記入の上、会場内では必ずネームプレートをつけてください。
- 7) 会場内での連絡、呼び出し等については、受付の掲示板をご利用ください。

クローク

クロークは特に用意しておりません。各自会場に荷物を持参するか、1階コミュニティ・スタジオ、または2階アカンサス・スタジオBをご利用ください。なお、貴重品・パソコン・壊れもの・食品類はお手元に置いてください。

食事・休憩

会場内では、昼食を販売しておりません。ご昼食をご持参いただいた方は、地域連携センター内に用意しておりますテーブル席、またはアカンサス・スタジオをご利用ください。

企業展示

地域連携センター1階において企業展示を行っております。是非、お立ちよりください。

特別展示

3号館3階エレベーターホールと廊下において、ナイチンゲール生誕200年特別展示をいたします。普段では見られない貴重なナイチンゲールの書籍等を展示しますので、是非、お立ちよりください。

体調がすぐれないときの対応

体調がすぐれないときには、スタッフにお声かけください。担当者が対応し、静養室等にご案内いたします。

非常時

非常時の場合は、担当者の指示に従ってください。
避難の際、エレベーターは使用しないでください。

演者（特別講演・教育講演・特別企画）の方へのお知らせ

- 1) 講演はすべてアカンサス・ホールで行います。
- 2) 演者の方は、講演30分前までに1階受付において登録を済ませ、パソコンに発表用データをインストールしてください。発表開始10分前には、座長との打ち合わせをすませ、会場内の演者席に御着席ください。お預かりしたデータは発表終了後、学術集会事務局が責任を持って削除・消去いたします。
- 3) 会場の発表用PCのOSは「Windows10」、使用するアプリケーションは「Microsoft PowerPoint 2016」です。また、Power Point ファイル作成にあたっては、Windows 標準フォント（MS 明朝、MSP 明朝、MS ゴシック、MSP ゴシック等）をご使用ください。その他のフォントでは、正しく表示されない場合がございます。
- 4) 発表データはUSB フラッシュメモリでご持参ください。お持込になる USB フラッシュメモリのウイルスチェックは、各自、事前に行なってください。
- 5) 作成されたファイル名は、「〇〇講演・氏名」で保存してください。
- 6) 運営上、動画の使用など、特別なデータの作成はご遠慮ください。
- 7) 発表データは持ち込まれたファイル単体で動くようにしてください。外部ファイルとのリンクはできません。

発表者へのお知らせ

- 1) 口演発表は、アカンサススタジオ Aで行います。
発表者は各群とも、10:00 までに1階受付において登録を済ませ、パソコンに発表用データをインストールしてください。発表開始5分前には、会場内の次演者席に御着席ください。お預かりしたデータは発表終了後、学術集会事務局が責任を持って削除・消去いたします。
- 2) 発表時間は、1演題につき20分（発表15分、質疑応答5分）です。
- 3) 会場の発表用PCのOSは「Windows10」、使用するアプリケーションは「Microsoft PowerPoint 2016」です。また、Power Point ファイル作成にあたっては、Windows 標準フォント（MS 明朝、MSP 明朝、MS ゴシック、MSP ゴシック等）をご使用ください。その他のフォントでは、正しく表示されない場合がございます。
- 4) 発表データはUSB フラッシュメモリでご持参ください。お持込になる USB フラッシュメモリのウイルスチェックは、各自、事前に行なってください。
- 5) 作成されたファイル名は「演題番号（発表者名）」（例：口演-1（〇〇△子））で保存してください。
- 6) 運営上、動画の使用など、特別なデータの作成はご遠慮ください。各発表につき、原則として1ファイルとさせていただきます。
- 7) 発表データは持ち込まれたファイル単体で動くようにしてください。外部ファイルとのリンクはできません。
- 8) 学術集会参加前に、必ず他のPCで動作の確認をしておいてください。発表データ受付での修正はできませんので、予めご了承ください。
- 9) 発表時のパソコン操作は、会場系の指示に従ってください。プレゼンテーション状態に設定した後のスライドの送り操作は、原則として発表者が行ってください。
- 10) 資料を配付される場合は、各自でご用意ください。会場での印刷はできません。

一般演題発表(示説)の方へ

- 1) 示説発表は、両日とも地域連携センター3階の「ホワイエ」で行います。
- 2) 1階で演者受付を済ませ、発表時間30分前までに掲示してください。発表開始10分前に発表会場にお越しください。担当司会者と簡単な打合せを行ってください。
- 3) 発表時間は、1演題につき15分(発表10分、質疑応答5分)です。
- 4) ポスターのサイズは、演題名・発表者名・共同発表者名・所属を含めて、縦180cm×横90cmに収まるように準備してください。演題番号と掲示のための画鋏、テープはこちらで用意します。
- 5) 資料を配付される場合は、予めご用意ください。会場での印刷はできません。
- 6) 発表者が不在の場合、発表時間の繰り上げはありません。定められた時間で始めてください。
- 7) ポスター掲示は1日ごとの貼り替えです。その日のプログラムが終了時点で取り外し、お持ち帰りください。

研究発表(口演・示説)座長の方へ

- 1) 座長の方は、担当される群の30分前までに玄関受付1階で座長受付をお済ませください。
- 2) ご担当の群の発表開始10分前に会場へおいいただき、演者と簡単な打ち合わせをお願いします。
- 3) 口演は1演題20分(発表15分・質疑応答5分)、示説は1演題15分(発表10分・質疑応答5分)です。時間厳守をお願いいたします。

理事会セッション企画者の方へ

- 1) 理事会セッションは、3演題とも1日目に行われます。
- 2) セッションⅠとⅡはアカンサスホールで、セッションⅢはアカンサス・スタジオ A が会場です。
- 3) 発表者は、玄関受付1階で演者受付をお済ませの上、開始10分前に会場へおいでください。
- 4) 発表データはUSBフラッシュメモリでご持参ください。お持込になるUSBフラッシュメモリのウイルスチェックは、各自、事前に行なってください。
- 5) プレゼンテーションソフトウェアにつきましては、一般演題発表(口演)と同様です。発表データは、直接会場のパソコンにインストールしてください。配布資料の印刷を希望される方は、各自でご用意ください。会場での印刷はできません。
- 6) 会場設営・運営(進行)は、セッション企画者が行ってください。

交通アクセス

- JR 徳島駅から路線バスをご利用の場合 約15分

徳島市営バス

〔南部循環(左回り)〕または〔山城町(ふれあい健康館)〕行きに乗車

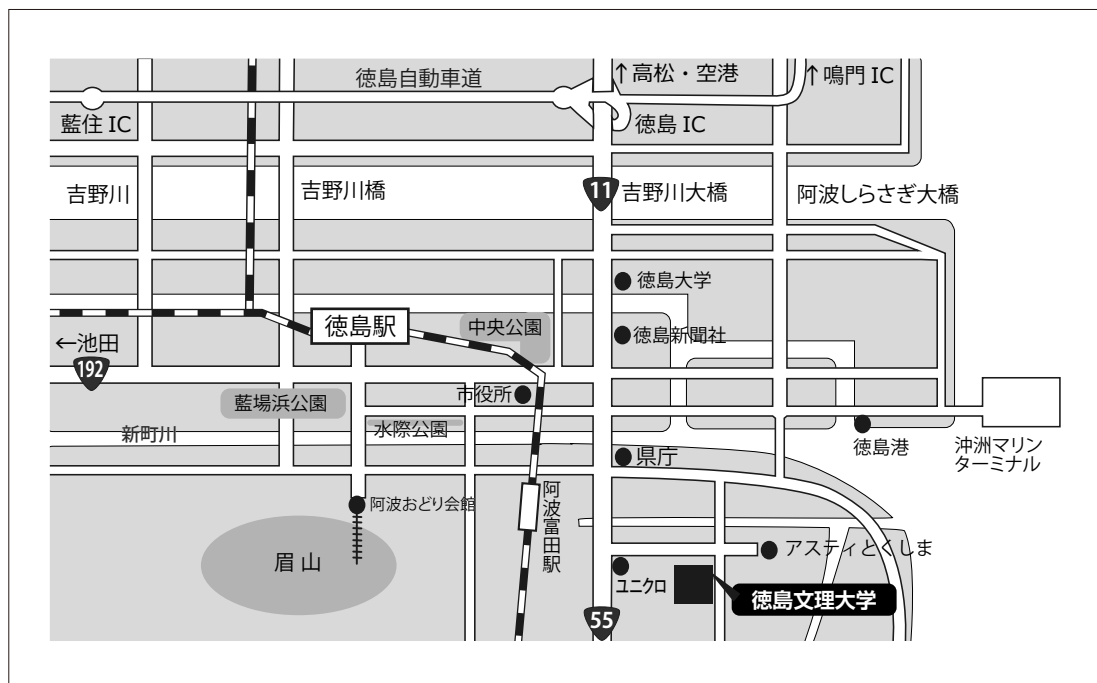
〔文理大学前〕バス停下車 徒歩1分

- JR 徳島駅からタクシーをご利用の場合 約10分

- 車をご利用の場合

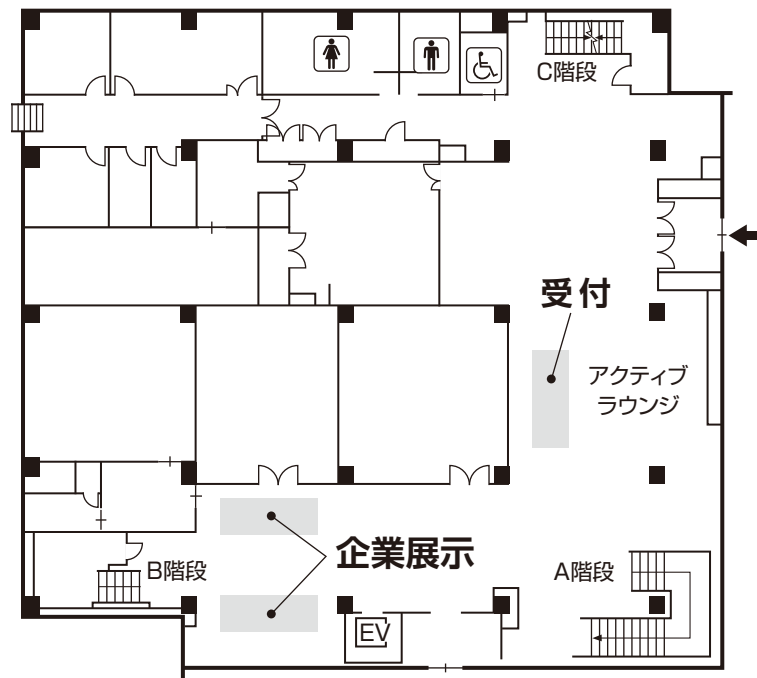
徳島自動車道徳島インターチェンジから南方面へ約15分

神戸淡路鳴門自動車道鳴門インターチェンジから南方面へ約30分

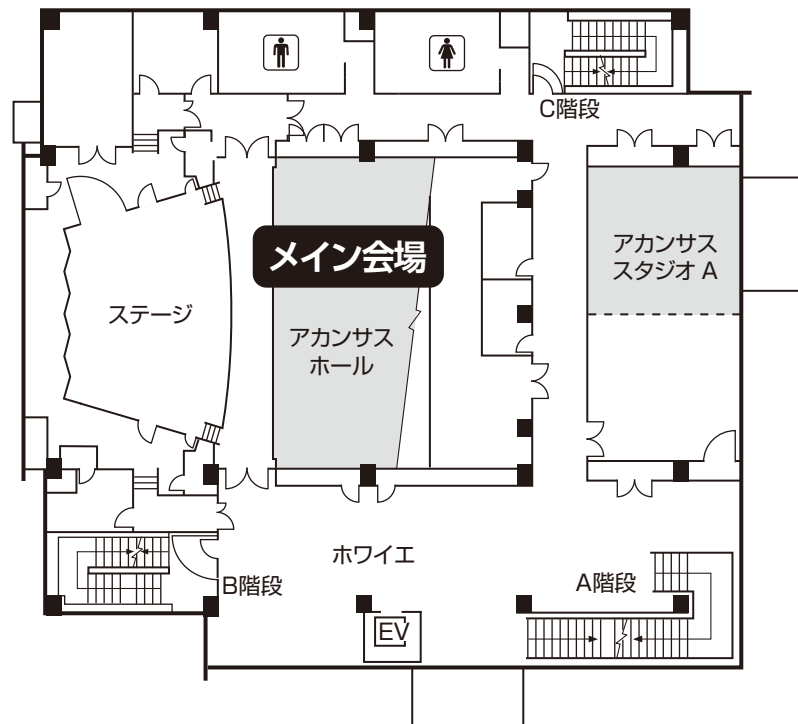


会場案内図

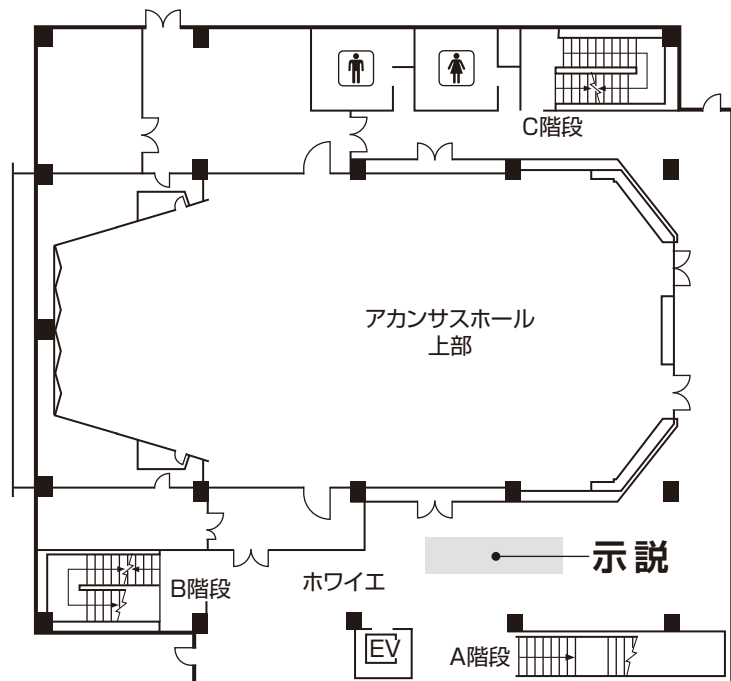
2号館 1F



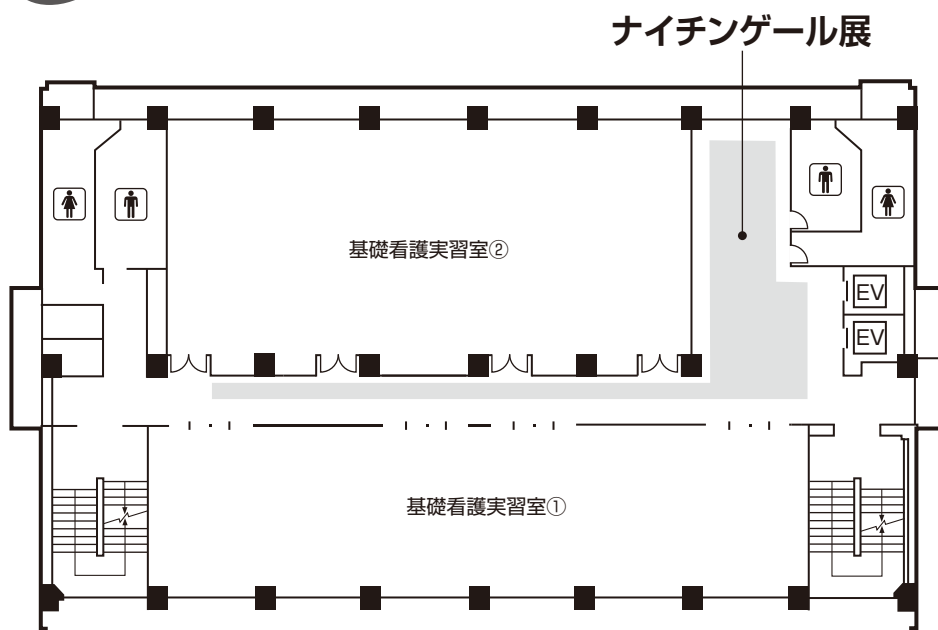
2号館 2F



2号館 **3F**



3号館 **3F**



1日目 9月4日金

	アカンサス・ホール	アカンサス・スタジオ	ホワイエ	3号館 3F
9:00	9:00～ 受付開始			9:00 ～ 17:00 ナ イ チ ン ゲ ー ル 展
10:00	9:50～10:00 会長挨拶 10:00～11:00 会長講演 ナイチンゲール思想をどう継承するか ー『看護覚え書』と『産院覚え書・序説』を通してみえる近未来の課題ー 演者：金井 一薫 座長：渡部 尚子			
11:00	11:10～12:10 教育講演Ⅰ ナイチンゲールが描いた 21世紀の在宅看護 演者：小川 典子 座長：魚崎 須美	11:10～12:10 演題発表 □ 演Ⅰ群 座長：高橋 順子		
12:00				
13:00	13:10～14:10 特別講演 ポルトガルの文人モラエスと徳島 演者：石川 榮作 座長：石川 恵子		13:10～14:10 演題発表 示説Ⅰ群 座長：森下 利子	
14:00	14:20～15:20 理事会セッションⅠ 戦争と感染症ーそのとき看護師は ー歴史に学ぶ感染症と看護ー 講師：川原 由佳里 司会：川嶋 みどり 屋宜 譜美子	14:20～15:20 演題発表 □ 演Ⅱ群 座長：黒田 裕子		
15:00	15:30～16:30 理事会セッションⅡ 新型コロナウイルス感染症対策における看護の力 ー徳島県の看護活動と今後に向けてー 講師：稲井 芳江 司会：山崎 公美子	15:30～16:30 理事会セッションⅢ 歴史研究で心掛けている こと ー論文投稿の経験、資料 の集め方を中心にー 講師：滝内 隆子 司会：丸山 マサ美 屋宜 譜美子		
16:00	16:40～ 総会			

2日目 9月5日土

	アカンサス・ホール	アカンサス・スタジオ	ホワイエ	3号館 3F
9:00	9:00～ 受付開始			9:00 ～ 12:00
10:00	9:30～10:30 教育講演Ⅱ 看護の危機と未来 演者：川嶋 みどり 座長：丸山 マサ美		9:30～10:30 演題発表 示説Ⅱ群 座長：森下 利子	ナ イ チ ン ゲ ー ル 展
11:00	10:40～12:00 特別企画 歴史から学ぶ学問としての看護に必要なもの —看護教育の黎明期を知る31人の識者からの 意見をもとに— 演者：北島 泰子 前田 樹海 座長：金井 一薫			
12:00	12:00～ 次期会長・挨拶 渡部 尚子			

会 長 講 演

ナイチンゲール思想をどう継承するか —『看護覚え書』と『産院覚え書・序説』を通してみえる 近未来の課題—

金井 一薫

徳島文理大学大学院看護学研究科 教授

【はじめに】

「歴史から学ぶこれからの看護」を思考するとき、看護界にとってひとつの軸となるものは、ナイチンゲール思想から何を学び、それをどう近未来に継承するかという課題であろう。

ナイチンゲールは、偉大な思想家であり、看護の実践家であり、教育者であり、統計や建築の分野に長け、加えて優れた社会改革者でもあった。その彼女の思想の真髄を探るには、直筆の文献を読み解くほかはない。幸い、ナイチンゲールには現存するもので150点を超える印刷文献がある。この中で筆者が特に関心をもっているのは、以下に記す5つの『覚え書』である。Bishop¹⁾の文献から探ってみると、それは書かれた年代順に、①『Notes on matters affecting the health, efficiency, and hospital administration of the British Army, founded chiefly on the experience of the late war』（主に先の戦争での体験に基づく英国陸軍の健康と能率と病院管理に影響を与える事項に関する覚え書・略して英国陸軍の保健覚え書・1858）、②『Notes on Nursing』（看護覚え書・1860・1861）、③『Notes on Hospitals』（病院覚え書・1858・1863）、④『A Note on Pauperism』（救貧覚え書・1867）、⑤『Introductory Notes on Lying-In Institutions』（産院覚え書・序説・1871）となる。いずれもナイチンゲールの著作を代表するもので、各々のテーマについて、深い示唆が与えられる内容となっているが、本講演では、上記5点のうち②と⑤に焦点を絞り、そこからわが国の近未来の看護のあり方を展望していく。

1.『看護覚え書』から何を、どう継承するか

視点1：「タイトル」が示す『看護覚え書』の価値と“5つのものさし”

『看護覚え書』のタイトルは、「Notes on Nursing —What it is, and what it is not—」である。ナイチンゲールは本書の中で、何が看護であり、何が看護でないかを解き明かすことを目的として執筆したことがわかる。何が看護で何が看護でないかを判定するには、その答えを導く論理が無ければならない。160年前、ナイチンゲールはすでに看護の本質をつかんでおり、それを『看護覚え書』を通して示唆したのである。『看護覚え書』の価値は、人類史上初めて、看護とは何かを明確に提示した点にあり、この視点は時代を超え、国を超えて継承されるべきである。

筆者はナイチンゲールが示した「看護実践を看護に導くための基準」を、1991年に“5つの看護のものさし”として提示した。

《5つの看護のものさし》

1. 生命の維持過程（回復過程）を促進する援助
2. 生命体に害となる条件・状況をつくらない援助
3. 生命力の消耗を最小にする援助
4. 生命力の幅を広げる援助
5. もてる力、健康な力を活用し、高める援助

上記のものさしは、どのような対象者に対しても、またどのような看護の提供場所であっても、さらに看護職に限らず職種を超えて活用が可能であり、行われた実践が《看護であったか、なかったか》を、看護師個人が、あるいはチーム全体で判断していくときに活用できるものである。ものさしの発想は、現時点では広く看護・介護界に浸透し、多くの臨床・教育現場で活用されて今日に至っている。この視点は今後も見失うことなく、近未来にもつなげていきたい。

視点2：看護の視点と医学の視点は異なる

ナイチンゲールは『看護覚え書』の「はじめに」の中で次のように語った。

「看護の知識は、医学知識とははっきり区別されるものである。」

今日とこれからの看護のあり方を考えるうえで、上記の言葉はそのコアの概念となる。ナイチンゲールは、看護師と医師はその基盤となる知識が異なる別々の職業であるとした。この視点は、今日においては職業上、また理念上は強く主張されているが、どこが、どう異なるのかという具体的な内容については、きわめて曖昧なままである。早急に検証されるべきである。

視点3：「看護とは何か」を明確にするには「病気とは何か」を明確にすること。

『看護覚え書』の「序章」の冒頭には、「病気とは何か」が明示されている。なぜ、看護を説くのに病気を先に説くのだろうか？ その答えは病気の見方の延長線上に看護のあり方がみえてくるからである。病気を医学の視点でとらえれば医師のように、診断と治療を行う職種が育つ。だから看護師の専門性を樹立するためには、看護の視点で“いのちのしくみや病気”をとらえなければならない。

この考え方に立てば、「視点2」で指摘した“看護の専門性”の内容が描かれる。

(図1)は、医学と看護の違いを明確にするために、筆者が描いたものである。人間の体のしくみや病気の成り立ちや、さらに回復を促す視点は、医学の視点とは異なる看護独自の視点で内容を提示できなければ、看護本来の仕事は明確にならない。現在のように医学と同じ視点で学び、実践しようとするれば、それは必然的に“医師の助手”という立場に置かれてしまう。ここに看護界最大の課題がある。

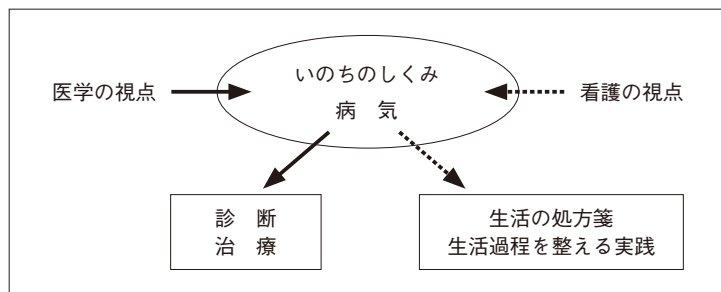


図1 本来の看護のあり方

現在の看護界は、医学の視点での学びが強く、特に高度実践看護師の頭は限りなく医師に近づいている。(図1)の矢印 ◀..... の内容の構築を急がなければならない。

視点4：「序章」の冒頭の言葉：「病気とは回復過程である」を解く

医学と異なる視点をもつナイチンゲールの疾病観は、以下の言葉にみることができる。

「すべての病気は、その経過のどの時期をとっても、程度の差こそあれ、その性質は回復過程 (reparative process) であって、必ずしも苦痛をとまなうものではないのである。つまり病気とは、毒されたり (poisoning) 衰えたり (decay) する過程を癒そうとする自然の努力の現われであり、それは何週間も何カ月も、ときには何年も以前から気づかれずに始まっていて、このように進んできた以前の過程の、そのときどきの結果として現れたのが病気という現象なのである。」

日本の看護界ではよく知られた文章であるが、この文章の読み解き方次第で「看護とは何か」をはっきりとさせることができるという視点については、これまでほとんど主張されてこなかった。文中のキーワードは「回復過程 (reparative process)」である。

「回復過程」とは、「人体内部にはたらく回復のシステム＝自然治癒力」のことで、一般的には人体を統括して恒常性を維持しているシステムの全体をさす。このシステムの詳細が、最近の生命科学の知見によって解き明かされ始めている。これらの知見を用いて『看護覚え書』を読み直せば、ナイチンゲールの時代には説明がつかなかった世界が広がってくる。看護界における今日的テーマを思考するとき、ここに焦点を当てて看護学全体を見直し、再構築する必要があるのではないか。

【人体の回復のシステムとは】

生存のための条件を一定に保つシステムで、様々な表現、様々な実態として言い表すことができる。

- ・内部環境 (身体を満たしている液質) の恒常性と安全性の保持＝ホメオスタシス
- ・伝達物質 (メッセージ物質) を使った細胞同士・臓器同士のコミュニケーションによる内部環境の安定性の確保
- ・細胞、組織、臓器のあらゆる段階で生体の秩序を維持しようとする生物学的なフィードバックシステム
- ・生物が内蔵する自己修復プログラム

これらのシステムの具体的な姿は、

- ◆細胞の作り替えのシステム
- ◆代償機能の発動
- ◆免疫機能の発動

など、生命の多彩な現象の中に「回復のシステム」の具体的姿を見ることができる。

ナイチンゲールは、こうした「回復システムの働きの全体」を身体内部に宿る「生命の法則」「自然の法則」と呼び、同時にそれらの生命現象を「看護の法則」「健康の法則」とみなして「自然の法則」に則った看護＝生活のありようを実現させようとした。

この指摘内容こそ、現代看護はしっかりと再認識し、近未来へと継承すべきである。

【関連するナイチンゲールの言葉】

「神が、われわれの心の容器とされたこの身体を、その心の健康なあるいは不健康な容器に仕立てる法則については、ほとんど何も学ばれてはいない。私はこれらの法則——すなわち生命の法則——が、ある程度は理解されていることを否定はしない。しかし母親たちでさえも、それらの法則を学ぶことが、自分たちにとって価値あるとは思っていない。彼女たちは、それを医学あるいは生理学の知識と呼んで、もっぱら医師のものと思っている²⁾。」

ナイチンゲールは、「生命の法則＝自然の法則＝健康の法則」を医学の知識として片づける傾向に警鐘を鳴らし、それを看護活動の主軸におくことを力説したのである。後に、彼女はそうして展開される看護を「an Art and Science」と名づけ、専門職業の礎としたのであった。

筆者は今、こうした視点に立つナイチンゲール看護論を「生物学的」「生命誌的」看護論と呼ぶことができると考えているのだが、この視点を先の(図1)で示した ◀..... 部分に取り込めば、その先に「看護の独自の機能」を導きだすことが可能となる。

視点5:「看護の独自の機能」を明確にする

人体には自然の回復のシステムが常に発動しており、そのシステムに破綻や乱れや混乱が生じたときに何らかの症状が出現する。それを私たちは「病気」と呼んでいるのだが、その時、看護はその回復のシステムが体内で最大限発動しやすいように、生命力の消耗を最小にしながら、最良の条件を生活過程の中に創り出すことである。一度大きく乱れた回復のシステムは、自動的に元の姿に戻ることは困難であるから、外部環境(生活)を整えて、身体内部に働くシステムが発動しやすい条件を創るように支援しなければならないのである。ここに看護の専門性と独自性を見出すことができる。

医学は、症状・病状に対してそれらに直接アプローチして回復を促すが、看護は生活過程を健康的に整えることによって、体内の回復のシステムの発動を促し、生体の回復力を促進させることにある。これが医学と看護との決定的な相違である。

したがって、専門職としての看護職が今後主力を挙げて研究すべきテーマは、「生活過程を整えることが、体内の回復過程をいかに助けるか？」を科学的に証明することにあるだろう。

2.『産院覚え書・序説』から何を、どう継承するか

視点1: 看護師とは異なる専門職としての助産師

1860年にナイチンゲール看護師養成学校を設立したナイチンゲールは、翌1861年にキングス・カレッジ病院内に助産師訓練学校を開設した。それまでの英国では、長年、助産は男性医師または訓練を受けていない素人女性によって行われており、ナイチンゲールは人の誕生にかかわる助産という営みを、訓練された女性の手に取り戻そうとしたのである。看護師同様に社会的身分が低かった助産師を教育することで、科学的裏付けをもって仕事ができる新たな助産師を誕生させようという試みが「助産師学校の設立」であった。以来、英国社会では「看護師」と「助産師」は別々の資格として、それぞれが独自のカリキュラムを作成して、各々異なる教育機関で育成している。この点は日本の資格制度とは大きく異なる。

【関連するナイチンゲールの言葉】

「裕福な女性は十分な資格のある女性を見つけることができずに男性に手当てをしてもらうほかなく、貧しい女性は十分な資格のある男性に謝礼を払うことができないので、資格のない女性に頼むしかない³⁾。」

視点2: ナイチンゲール独自の感染防止策

助産師学校は、キングス・カレッジ病院の産科棟に蔓延した「産褥熱」のために、やむなく閉鎖された。開設後わずか6年であった。ナイチンゲールは産褥熱による産褥婦の死亡という事態を重く見て、英国および大陸における出産に関わる実態を、統計表や資料に基づいて把握した。

そのうえで感染を防止するための産科棟の構造や管理のあり方を明らかにし、助産師ならびに助産師学校のあるべき姿を打ち出した。これが『産院覚え書・序説』の内容である。

ここではまず、ナイチンゲールが示した安全なお産のための条件とは何かを見てみよう。

- 1) 感染防止の観点から、一般病院の中に産科棟を造らないこと。(一般患者と妊産婦を混合させない)
- 2) 居室はすべて、年に3～4回は消毒・殺菌剤である石灰水で洗浄すること。重症患者が出た場合は、閉鎖して燻蒸消毒する。床は毎日洗浄する。
- 3) 病室に患者を密集させない構造をもつ建物が必要である。建物には十分な換気ができる窓の配置を工夫すること。
- 4) 医師や医学生、特に医学生の病棟・病室への入室を制限し、感染源になることを予防する。(当時の医師たちには手洗いの習慣がなかった。また医学生は産科棟外部から出入りするため、感染源になる可能性が高かった。)
- 5) 助産ケアの専門家(助産師)を常駐させ、衛生に精通した教育管理システムを整えること。
- 6) 家庭分娩の方が病院分娩よりも死亡率が低いことから、家庭で安心して分娩ができるような制度を作ること。

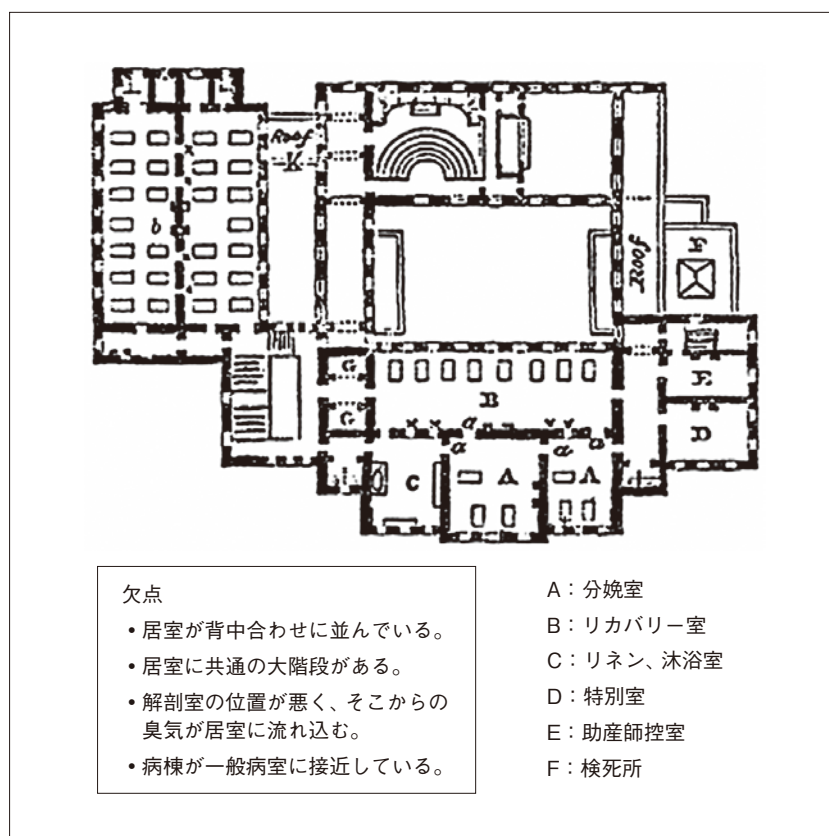


図2 キングス・カレッジ病院の産科棟の構造⁴⁾

これは推奨できない病棟構造の1つ

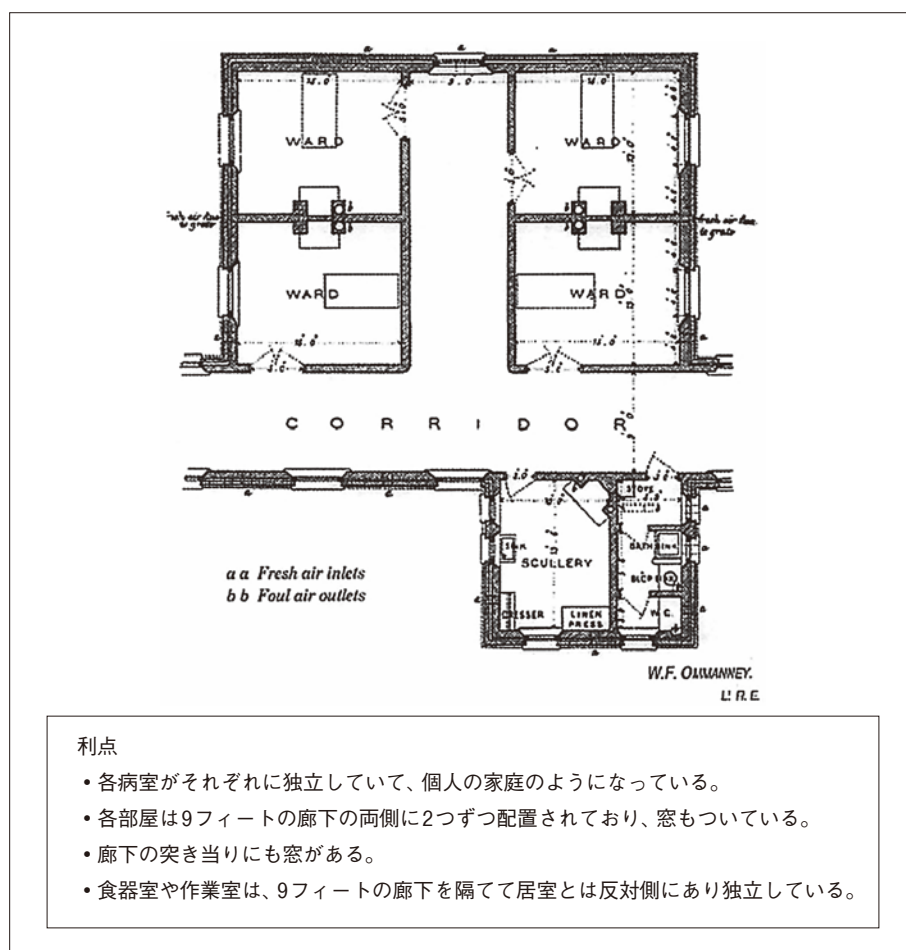


図3 理想的な産科棟の1つ⁵⁾

視点3：助産師資格のあり方

助産師 (midwife) と助産看護師 (midwifery nurse) とは別々の資格である。

〔関連するナイチンゲールの言葉〕

「助産師とは、科学的かつ臨床的な訓練を受けて、必要に応じて相談を得ることを条件に、あらゆる産科医と同様、正常異常を問わずあらゆる分娩例に対処できる女性のことを指す。

助産看護師とは、正常分娩であればあらゆるケースに対処でき、また異常な症例の場合には産科医を呼ばねばならないことをわきまえているように訓練された女性を指す⁶⁾。」

このナイチンゲールの見解からみると、現在の助産師は「助産看護師」である。

視点4：助産師教育のあり方

1) 助産を教えるには、適切な助産施設がなければならない。

2) 助産学教育の方向性

ナイチンゲールは、最終的には医師と同じように正常異常を問わずにあらゆる分娩に対処できる助産師を育てようと考えていた。そのための科目内容とレベルに関しては、以下のように示唆している。

【関連するナイチンゲールの言葉】

「助産学ばかりでなく解剖学や生理学などを科学的に教える教授がいなければならず、病理学とその専門分野を教える教授も必要です。しかし何よりも必要なのは、衛生学およびその実際を教える教授です。(略)たぶん、これらの教授たちはすべて、あるいはほとんど、最初は男性であるにちがいありません。たぶん、やがてそのうちに、それらの教授たちのすべて、あるいはほとんどが女性となるでしょう⁷⁾。」

「女性を医師にするよりも、つまり女医師にするよりもっとよいことがあります。実務的にまた科学的に、この上なく完全な訓練をほどこすことによって、誰もが女性のものであると認める助産という医師の分野を、“男性のように”ではなく女性ができるようにすることです⁸⁾。」

「最高の産科医が手当てし、相談にあずかるのと同じように、正常や異常を問わず、あらゆる分娩、女性と子供の病気に際して手当てをし、かつ相談にあずかることを女性ができるようにしたいのです⁹⁾。」

『産院覚え書・序説』が教えていることは、助産師は独立した専門職であって、産科医と同様、正常異常を問わずすべての助産に携わり、女性と子どもの病気に精通した訓練された人材であるということである。これがナイチンゲールの理想であった。

しかし、結果的に1861年に設立された助産師学校は、諸々の条件が整わなかったがために助産看護師訓練学校からスタートしている。その後、ナイチンゲールは「助産師訓練校」を設立することはなかった。

つまり、現代において養成されている助産師は、ナイチンゲールの理念からみれば「助産看護師」なのである。実力をつけてきた現代の助産師分野において、今後、「助産師とは何か」を問い直し、ナイチンゲールが考えた「助産師教育」に近づくことが可能なかどうか、一度検討してみることは必要だろう。

【考 察】

視点1：看護師は医師とは異なる専門職であるというナイチンゲールの指摘

19世紀は、少数ではあるが、女性たちが高等教育を受けることができるようになり、各分野で徐々に社会的自立を獲得していった時代である。イギリスでは1858年になって「医師法」が制定され、医師の資格や教育が整備された。歴史的にみて、医師の世界にも階層性があったイギリスだが、当時のナイチンゲールは多くの優れた医師たちと交流があった¹⁰⁾。彼女には医師になる道も拓かれていたはずである。

しかしナイチンゲールは医師という職業を選択せず、看護という職業を開拓することにエネルギーをつぎ込み、それまで顧みられなかった仕事に新たな光を当てた。看護がlife(生命や生活)に直結した仕事だからである。

“看護とは何か”という定義を史上初めて明らかにしたナイチンゲールは、その具体的な看護活動のあり方を、余すところなく『看護覚え書』の第1章から第15章(補章)の中で語っている。病院であろうと、施設であろうと、在宅であろうと、そこに看護がある限り、その営みは医師とは明らかに異なるものである。また医師がする必要のないものである。そしてナイチンゲールはその看護の営みを“an Art and Science”と呼んだ。ナイチンゲールが目指した看護は、「いのちのしくみ」に沿って展開され、いつでも人々の生活の中にあり、かつ個々人の生活や集団(コミュニティ)の生活様式を変革させる力をもつものであった。

医師とは異なる専門職として育てられた看護師は、今、その技と知見とを独自の学問として発達させてきただろうか？ 看護学は未だ道半ばにある。ナイチンゲール誕生から200年が経過した

が、助医師になることはナイチンゲール思想にそぐわないという視点を守り続けなければならない。

〔関連するナイチンゲールの言葉〕

「患者に生じる結果についての正確な判断を下す能力は、そのすべてが患者の生活をとりまくあらゆる条件や状況の探究ということにかかっている¹¹⁾。」

視点2：医学が万能になろうとしていた時代、女性に医師になる道を選択させるのではなく、看護の価値に目を向けさせた。

1858年に医師法が成立した頃、イギリスの医学界は診断・治療面において、近代科学の恩恵を受けて大きく変貌し始めた。ナイチンゲールが看護師・助産師という職業を独立した専門職として位置づけたのは、これと重なる時期である。女性たちには医師になるという道もなかったわけではないから、能力がある女性たちが女医師という職業を選んだとしても不思議ではない。しかしナイチンゲールは、優れた女性が医師になる道を選択することには反対し続けた。

それはひとつには、看護師や助産師という仕事がきわめて女性たちの力を発揮するに適していると考えたからである。「女性にしかできない仕事」ではなく「女性だから相応しい仕事」と考えたのである。ナイチンゲールは家庭を健康に保つためには、強いては不健康な社会から病気を追放するためには、さらに安全で安心した助産の実現には、どうしても女性たちの力が必要だと確信していた。女性が女性を訓練し、社会でその力を発揮することによって、多くの生命を救い、暮らしのあり方を根底から変えていこうとしたのである。

さらに当時の医学の発展の姿をよく観察していたナイチンゲールは、当時の医学や診療のあり方に未熟さや不確かさを感じており、彼女が考える看護と看護師たちの働きに価値があると訴えようとしたことがわかる。体内の回復のシステムの発動に、生活を整えることで力を貸すという看護という活動がなければ、病気は真の治癒に至らないからである。

〔関連するナイチンゲールの言葉〕

「病気につきもので避けられないと一般に考えられている症状や苦痛などが、実はその病気の症状などではけっしてなくて、まったく別のことからくる症状——すなわち、新鮮な空気とか陽光、暖かさ、静かさ、清潔さ、食事の規則正しさと食事の世話などのうちのどれか、または全部が欠けていることから生じる症状であることが非常に多い¹²⁾。」

「病理学上の知識の増大はめざましい。しかし、病理学は病気によって人体組織に最終的に起こった変化を教えてはくれるが、そうした病気の経過中に見られる変化の徴候を観察する技術については、ほとんど何も教えてくれない。それどころか、むしろ医学の基本的な要素のひとつである観察が退歩してきていることを、心配すべきではないだろうか¹³⁾。」

現代において、医学の発展にはめざましいものがある。AIを駆使しての診断や治療が行われ、医学万能の時代が、ナイチンゲールの時代に比して質を変えた形で到来している。そこでは生活のあり方を見つめるより治療や薬がすべてであり、自然の法則に則った生き方は後方に押しやられている。このように現代は、ナイチンゲールの時代ときわめて類似点が多い。患者を観ないで病気を診るという傾向が増大すれば、そこに再び看護の視点が必要となる。ナイチンゲールは、患者をとりまくあらゆる生活事象や社会現象に関心を抱き、その現象の意味するところを看護の眼で見て、適切な支援につなげよと言ったのであった。こうした活動は、医師が行う診療活動とは明らかに異なるものである。看護師には医学とは異なる看護学を教え込まなければならない。

【近未来への課題】

課題① ナイチンゲールの看護思想は、彼女の明晰な論理的思考によって導き出された概念であり、優れた「看護の本質論」を堅持するものであるが、残念なことにそれは概念にとどまっており、19世紀の学問の域を出ていない。つまり看護の機能の生理的な作用機序についての、生理学をはじめとする生物諸科学による論証までには至っていないのである。そこで現代の生物諸科学にもとづくその論証が求められる。医科学が医療の効果を検証するのと同様、看護実践の効果も看護学によって検証されるべきである。しかしそこには意外な難しさがある。それは、人間の生命過程を解明する科学はすでに多くの知見を蓄積してきているが、それを人間の精神性を含む生活過程のケアとの相互関係に結びつける研究はまだほとんど手つかずだからである。それこそが、今後の看護学者に求められる研究課題である。

そのためには、ナイチンゲールが提起した看護の定義に従い、「自然の回復システムの発動を促進するために看護は何をすべきか」という命題を念頭におき、「日常の生活支援が、どのように体内の自然の回復システムの促進に寄与しているか」を、日々の研究活動や実践活動を通して明らかにしていくことが、近未来に課せられた喫緊の課題となるであろう。

課題② 日本の助産師教育は、看護師資格取得を前提に制度化されているので、ナイチンゲールの提言した「助産看護師」という枠から出ることはできない。医師と同様に正常異常分娩のどちらにも対処できる総合的な力を備えた助産師教育が必要か否かと問い返してみる必要があろう。それには海外の多くの国がそうであるように、看護師教育とは別に、助産師教育の独立というテーマに取り組まなければならない。この討議は助産師分野の方々の今後の討議と判断に委ねたい。ことと次第によっては、歴史は大きく動くかもしれない。

【引用文献】

- 1) Bishop. W.J. (1962). A Bio-Bibliography of Florence Nightingale. Dawsons of Pall Mall, London.
- 2) Nightingale F. (1860/2011). 湯横ます, 薄井坦子, 小玉香津子, 田村真, 小南吉彦 (訳) 看護覚え書・改訂第7版. P.19, 現代社.
- 3) Nightingale F. (1871/1983～1984). 薄井坦子, 小玉香津子 (訳). 産院覚え書. 総合看護, 19(2). pp.16-17.
- 4) 【図1】 McDonald L. (2005). Florence Nightingale on Women, Medicine, Midwifery and Prostitution, Volume 8 of The Collected Works of Florence Nightingale. p.282. Wilfrid Laurier University Press.
- 5) 同上書. P.322
- 6) Nightingale F. (1871/1983～1984). 薄井坦子, 小玉香津子 (訳). 産院覚え書. 総合看護, 19(1). p.33.
- 7) 同上書. 総合看護, 19(2). P.19.
- 8) 同上書. 総合看護, 19(2). P.17.
- 9) 同上書. 総合看護, 19(2). P.17.
- 10) ザカリイ・コープ (1958/2010). 小池明子, 田村真 (訳). ナイチンゲールと医師たち (新装復刻版). 日本看護協会出版会.
- 11) Nightingale F. (1860/2011). 湯横ます, 薄井坦子, 小玉香津子, 田村真, 小南吉彦 (訳) 看護覚え書・改訂第7版. P.203, 現代社.
- 12) 同上書. P.14.
- 13) 同上書. P.200-201.

【参考文献】

- 1) 金井一薫(2019). 新版 ナイチンゲール看護論・入門. 現代社.
- 2) 金井一薫(2012). 実践を創る 新・看護学原論 ―ナイチンゲールの看護思想を基盤として―. 現代社.
- 3) Nightingale F. (1860/2011). 湯愼ます, 薄井坦子, 小玉香津子, 田村眞, 小南吉彦(訳). 看護覚え書・改訂第7版. 現代社.
- 4) Nightingale F. (1871/1983～1984). 薄井坦子, 小玉香津子(訳). 産院覚え書(1)～(6). 総合看護, 18(1)～19(2).
- 5) 平尾真智子(2020). ナイチンゲール看護論の現代的意義 ―医学史からみたナイチンゲール看護論. 看護教育, 61(4). PP.0334～0338.

一般演題

口 演

著書『看護と教育の探究』と岡本陽子の生涯

○丸山 マサ美

九州大学大学院医学研究院

I 目的

2020年3月30日、岡本陽子先生(以下、岡本と略す)が逝去(享年86歳)された。岡本は、九州大学看護学校5回生であったが、卒後より、母校の看護教育・研究の発展に尽くし、半世紀に亘り多くの看護教育者、臨床指導者を育てた人物である。偶然にも、筆者は、岡本の生涯の集大成と言える著書『看護と教育の探究(岡本陽子著、1997年3月30日発行)』を入手した。この書籍は、岡本の探究した看護と教育の足跡そのものであった。

本稿は、書籍『看護と教育の探究』に見る“岡本の看護観(一部)”を紹介すると共に、個人史“岡本陽子”の生涯に光を当てたものである。

II 方法

資料『すずかけ』¹⁾、『九州大学看護学校三十五周年記念誌』²⁾は、一次資料を入手した。岡本陽子の経歴は、岡本自身が生前に自記した資料を使用した。資料の入手は、親族へ研究の目的を明確に記述した説明文書を郵送し、同意文書による署名・押印を得た。

III 結果・考察

1. 著書「看護と教育の探究」に見る“共感”

本書は、岡本の研究を体系的に纏めたもので、内容は、「看護の原理」、「理論」、「実践」、「教育」の四章から構成されている。「はしがき」の中で、岡本は、「本書は、『未完成』のものであり、さらなる研究の踏み台となるべく著されたもの」と記述していた。

本稿では、第四章 看護教育, 三, 患者への共感, 1. 理論的前提の部分に着目した。岡本の探究は、一般的な『共感(概念)』にとどまらず「共感とは愛情そのものではないということである。共感は相互の独立した自己と無関係な他人、つまり見知らぬ者との間に起こるひとつの感情である。したがって、共感は親子の愛、身近な者同士の愛、男女の愛と同じではない。共感はいくまでも離れた者との間に生まれる感情である。それで共感想像力、意識的な努力を必要とする。看護が求める共感もこのような意味のものである。そして共感まさに sym=pathe (共に苦しむこと)であって、他者の苦痛を共有することなのである。それゆえ共感想像力に加えて苦痛の体験を鍵とする。これを前提としなければ学生の実習評価は混乱するであろう」³⁾と解説する。岡本は、学生に対して、非常に厳格であったが、学生の課題を自分の事のように真摯に取り組む教育者であった。イギリスのコミュニケーションカウンセラーであるシェイラダイナウは、「コミュニケーションに対する反応は4つの型に分けることができる。受動的な反応は、他人の考え、感情、信念、欲求の方が重要だという信念から生まれる。また、自己主張するコミュニケーションにおいては、感情移入は重要な要素である。それは、他人の立場に立って彼らが経験している世界を経験するという能力と意欲である。感情移入(em=pathe)は、傾聴と観察と尊敬が入り混じったものである」⁴⁾と解説する。筆者は、岡本の捉える看護教育とは、“学生の才能への期待と学生への愛情に基づくもの”と

捉える。現在、モデル人形中心の演習の中、『胃管挿入の体験』を記述した学生の心理状態を分析し、自己の苦痛の体験が患者の苦痛への共感となるためには自己の苦痛に耐えうる意志と患者への責任が求められる事⁵⁾と考察している点が興味深い。

2. 岡本陽子の生涯

岡本陽子は、1933年、熊本に生まれる。12歳で終戦を迎え、1955年、看護学校卒業後、1969年、母校の講師となる。1973年、看護学校廃校・医療短大助手として着任し、1997年定年まで、本学看護と教育のあり方を模索する。1998年4月以降、岡本は、新設大学設立準備室勤務、看護学科長を経て、2008年3月、九州看護福祉大学退職(72歳)。同年、福岡大学人文学部人文科学研究科卒業、学位取得。2013年9月、中央仏教学院入門課程卒業(80歳)の頃より、重篤な疾患の診断を受け、治療を開始する。2019年転移、放射線治療を受ける。2020年3月自宅にて逝去(資料1参照)。

岡本は、九州大学看護学校卒業後、1955年4月より1997年3月九大学医療技術短期大学部定年退職までの42年間、本学の看護・教育に携わる。その間、九州大学医療技術短期大学発行誌『すずかけ』編集委員長を務め、九州帝国大学医学部附属医院厚生女学部とその後設置された九州大学看護学校の徽章を学内広報誌『すずかけ』に紹介した。岡本は本学短期大学から大学・大学院への移行と研究と教育が結びつくシステムを求め続けた。1978年3月、岡本の筆による『ナイチンゲール碑』は、看護学校創立三十五周年記念時に九州大学医学部附属看護学校卒業生一同から大学に寄贈され、今なお母校の看護の発展を見守っている。

〈資料1. 岡本陽子の略歴〉

1933(昭和8)年	7月7日生まれる、1945(昭和20)年 終戦、1952(昭和27)年 高校卒業
1955(昭和30)年	九州大学看護学校卒業九州大学医学部附属病院勤務(30年4月第1外科、34年4月小児科転科)、1965(昭和40)年2月退職(留学の為)
1966(昭和41)年	カナダマクギル大学脳神経病研究所留学・専攻課程修了・帰国(41年4月、41年8月脳外科)
1967(昭和42)年	1968(昭和43)年まで国内留学(国立公衆衛生院専攻課程修了)
1969(昭和44)年	九州大学看護学校講師、1971(昭和46)年 九州大学看護学校教務講師、短大設置、1973(昭和48)年 九州大学看護学校廃校・短大助手
1976(昭和51)年	九州大学医療技術短期大学部講師昇任(11月勤続20年表彰)
1978(昭和53)年	助教授昇任、1981(昭和56)年7月から10月 在外研究2ヶ月カナダ、米国(49歳)、1993(平成5)年12月 短大教授昇任(62歳)
1997(平成9)年	九州大学医療技術短期大学部定年退職(63歳)、九州看護福祉大学設立準備室勤務より看護学科長を経て、2008(平成20)年 退職
2013(平成25)年	中央仏教学院卒業入門課程(80歳)、2020(令和2)年3月30日 逝去

【引用文献】

- 1) すずかけ, 九州大学医療技術短期大学部広報第15号, 九州大学医療技術短期大学部発行, 1995年
- 2) 九州大学看護学校三十五周年記念誌, 九州大学看護学校卒業生代表山村智恵子発行, 1986年
- 3) 岡本陽子著, 看護と教育の探求, p.178, 中川書店, 1997年
- 4) シェイラダイナウ, 自己主張できる看護婦, INR Vol.10, No.4, pp.21-26, 日本看護協会出版, 1987年
- 5) 岡本陽子著, 看護と教育の探求, pp.178-191, 中川書店, 1997年

日本看護歴史学会 大会・学術集会開催状況

	大会テーマおよび大会長・学術集会長	会 場 開催日
第1回	「日本看護歴史学会創立」 代表幹事：亀山 美知子	京都市立看護短期大学 1987(昭62)年8月26日
第2回	「近代看護婦発祥100年記念」 代表幹事：亀山 美知子	日本赤十字看護大学 1988(昭63)年8月20・21日
第3回	「看護歴史を学ぶ」 代表幹事：亀山 美知子	京都市立看護短期大学 1989(平元)年8月19・20日
第4回	「歴史研究の基礎と実践」 代表幹事：亀山 美知子	日本赤十字看護大学 1990(平2)年8月18・19日
第5回	「保健婦規則制定50年記念」 代表幹事：亀山 美知子	国立名古屋病院 1991(平3)年8月24・25日
第6回	「歴史研究の学問的アプローチ」 代表幹事：亀山 美知子	東京都女性情報センター 1992(平4)年8月22・23日
第7回	「医制120年 産婆制度を考える」 代表幹事：亀山 美知子	神戸市勤労会館 1993(平5)年8月28・29日
第8回	「今あらためて看護教育の歴史を振り返る」 代表幹事：亀山 美知子	東京大学山上会館 1994(平6)年8月19・20日
第9回	「戦後50年 看護改革の行方」 代表幹事：亀山 美知子	京都市女性総合センター「ウィングス・京都」 1995(平7)年8月5・6日
第10回	「歴史に見る女と男」 代表幹事：亀山 美知子	山形市・遊学館 1996(平8)年8月23・24日
第11回	「保健婦助産婦看護婦法制定50年記念」 代表幹事：亀山 美知子	京都大学会館 1997(平9)年8月23・24日
第12回	「戦後看護教育の検証」 代表幹事：亀山 美知子	大分県青少年会館 1998(平10)年8月7・8日
第13回	「世紀を越えて、看護の未来」 代表幹事：亀山 美知子	大阪府教育会館たかつガーデン 1999(平11)年8月30・31日
第14回	「21世紀への宿題 ～歴史に見る看護の智慧」 大会長：山本 捷子	秋田県生涯学修センター分館ジョイナス 2000(平12)年8月23・24日
第15回	「看護史をひろげる」 大会長：大平 政子	名古屋市立大学 2001(平13)年8月24・25日
第16回	「日本と世界の歴史を探究する —現代看護の源泉への探訪—」 大会長：高橋 みや子	山形県立保健医療大学 2002(平14)年8月31日・9月1日
第17回	「看取りの文化、古代から現代へ」 大会長：Ryder 島崎 玲子	青森県立保健大学 2003(平15)年9月5・6日
第18回	「歴史に学ぶ・歴史を創る」 大会長：岡崎 寿美子	北里大学 2004(平16)年8月25・26日

	大会テーマおよび大会長・学術集会長	会 場 開催日
第19回	「学校史を発掘する —高等教育の源流から看護学教育の歴史的省察を—」 学術集会長：藤村 龍子	東海大学 2005(平17)年8月27・28日
第20回	「歴史を拓く —看護教育120年を未来へ繋ぐ—」 学術集会長：芳賀 佐和子	東京慈恵会医科大学 2006(平18)年8月25・26日
第21回	「歴史から学ぶ看護のこころ —仏教系の看護婦養成と近代的看護教育—」 学術集会長：福本 恵	京都府立医科大学 2007(平19)年9月1・2日
第22回	「歴史の中に生きる看護の心」 学術集会長：丸山 マサ美	九州大学医学部百年講堂 2008(平20)年8月27・28日
第23回	「戦前戦後の看護の礎 —看護教育と実践の発展をさぐる—」 学術集会長：内田 卿子	聖路加看護大学 2009(平21)年8月19・20日
第24回	「今、実学を問う —歴史にみる看護教育実践活動—」 学術集会長：三上 れつ	慶應義塾大学 2010(平22)年9月19・20日
第25回	「歴史を掘りおこし 明日の看護を拓く」 学術集会長：仲里 幸子	沖縄県立看護大学 2011(平23)年8月26・27日
第26回	「災害の教訓から改革へ —私たちは何を伝えるべきか—」 学術集会長：川嶋 みどり	日本赤十字看護大学 2012(平24)年8月26・27日
第27回	「京都発、近現代における看護の礎を探る」 学術集会長：岡山 寧子	京都府立医科大学 2013(平25)年8月31日・9月1日
第28回	「今、語りつぐ看護技術の教育」 学術集会長：滝内 隆子	岐阜大学 2014(平26)年9月6・7日
第29回	「歴史学の可能性と未来 —空間と時間を越えて—」 学術集会長：城丸 瑞恵	札幌医科大学 2015(平27)年8月22・23日
第30回	「看護基礎教育での看護歴史教育の必要性 —看護医療の差別の歴史をどう教えるか—」 学術集会長：日下 修一	聖徳大学 2016年(平28)年8月20・21日
第31回	「看護の政策過程の検証 —歴史から看護のエビデンスを探る—」 学術集会長：田中 幸子	東京慈恵会医科大学 2017(平29)年8月18・19日
第32回	「ナイチンゲール看護のこころ今に伝える —看護・福祉思想と教育—」 学術集会長：佐々木 秀美	広島文化学園大学 2018(平30)年8月24・25日
第33回	「高度実践時代に向けて 看護と専門職のこれからを考える」 会長：川原 由佳里	日本赤十字看護大学 2019(令和)年8月31日・9月1日
第34回	「歴史から学ぶこれからの看護 生誕200年記念『ナイチンゲール展開催』」 会長：金井 一薫	徳島文理大学保健福祉学部看護学科・ 地域連携センター 2020(令和2)年9月4・5日

第34回学術集会 企画委員・運営委員・協力委員

(敬称略)

会 長	金井 一薫	徳島文理大学大学院看護学研究科
企画委員(全体)	金井 一薫	徳島文理大学大学院看護学研究科
(理事会セッション)	川嶋みどり	日本赤十字看護大学
	鈴木 紀子	国際医福祉大学
	城丸 瑞恵	札幌医科大学
	丸山マサ美	九州大学大学院
	屋宜譜美子	湘南鎌倉医療大学
	山崎公美子	日本医療大学
運 営 委 員	石川 恵子	前阪南中央病院
	魚崎 須美	神戸常盤大学
	森下 利子	徳島文理大学大学院看護学研究科
	瀧川 稲子	徳島文理大学大学院看護学研究科修士課程
協 力 委 員	多田羅勝義	徳島文理大学大学院看護学研究科
	大岡 裕子	徳島文理大学大学院看護学研究科
	東 敬次郎	徳島文理大学大学院看護学研究科
	上田伊佐子	徳島文理大学大学院看護学研究科
	小笹 美子	徳島文理大学大学院看護学研究科
	佐原 玉恵	徳島文理大学大学院看護学研究科
	高橋 昌江	徳島文理大学大学院看護学研究科
	谷 洋江	徳島文理大学大学院看護学研究科
	橋本 文子	徳島文理大学大学院看護学研究科
	古川 薫	徳島文理大学大学院看護学研究科
	宮川 操	徳島文理大学大学院看護学研究科
	尹 玉鍾	徳島文理大学大学院看護学研究科
	松谷 孝雄	ナイチンゲール看護研究所
	荒川 泰士	(有)あらたケアサービス
	北島 結佳	徳島文理大学大学院看護学研究科修士課程
	後生川礼子	徳島文理大学大学院看護学研究科修士課程
	名護 彩香	徳島文理大学大学院看護学研究科修士課程
	北山 直希	徳島文理大学大学院看護学研究科修士課程
	坂東 恭子	徳島文理大学大学院看護学研究科修士課程
	山田 健代	徳島文理大学大学院看護学研究科修士課程
	西本多美子	徳島文理大学保健福祉学部事務局

第34回日本看護歴史学会学術集会 ご支援をいただいた企業・団体一覧

本学会学術集会には、以下の企業および団体から、ご支援をいただきました。
ここに記して、厚くお礼を申し上げます。

寄 付

ナイチンゲール看護研究所

企業展示

(五十音順)

株式会社ヤマト

東洋羽毛中四国販売株式会社

丸善プラネット株式会社

ルベラス ウエノ

広告協賛

西白衣

徳島文理大学

協 力

徳島文理大学

第34回日本看護歴史学会学術集会 講演集

2020年8月21日発行

編集：第34回日本看護歴史学会学術集会 企画・運営委員会

発行責任者：第34回日本看護歴史学会学術集会 会長 金井 一薫
徳島文理大学保健福祉学部 看護学科

〒770-8514 徳島市山城町西浜傍示180

TEL：080-9295-2192（学会専用）

E-mail：34jsnh@gmail.com

学会 HP：https://jsnh34.secand.net/

出版：株式会社セカンド

〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F

TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025

https://secand.jp/

